

創発 Mail Magazine

創発は‘インキュベーション’のプロ集団。-問題解決のための新しい戦略・進化-

| [日本総研 創発戦略センター](#) | [研究員紹介](#) | [セミナー・イベント](#) | [書籍](#) | [掲載情報](#) | [ESG Research Report](#) |

今回のメルマガでは、前回の三輪メッセージに引き続き、農業プロジェクト“V-farmers”に関するコラムをお届けします。

■シンポジウムのご案内

『サステナビリティ・SDGsを活かした国づくり・企業経営』 2020年12月10日（木）14:00～16:30

オンライン開催第2回：東京から配信（YouTubeでのライブ配信）

東京シンポには、ESGリサーチセンターから橋爪麻紀子が登壇致します。関西シンポとは違った内容をお楽しみください。

1. IKUMA Message

[・米大統領選と世界経済の舵取り](#)

2. 創発eyes

[・コミュニティのために何かするということ](#)

3. 連載_農業

[・地域全体でもうかる農業を実現する“V-farmers”](#)



専務執行役員
井熊 均

IKUMA Message

米大統領選と世界経済の舵取り

11月3日に行われるアメリカの大統領選挙の行方に世界中が注目しています。良くも悪くも、この4年間で世界中の人が自由主義陣営の盟主であるアメリカが根深い問題を内包していることを理解しました。アメリカの国外では米中の対立が注目されていますが、アメリカが内包する問題はそれと同じかそれ以上に深刻と考えるべきなのかもしれません。

自由主義陣営が1980年代以降追い求めてきた、市場メカニズムを金科玉条に掲げる考え方を見直さなくてはならない、ことに賛同する人が多くなっています。世の中に完全なシステムはありませんから、社会が良い意味で成長するためには、時に市場側に舵を切り、時に公側に舵を切ることが必要です。1980年代、世界は市場側に大きく舵を切りました。その結果世界経済は大きく成長しました。問題を生みながらも舵取りが成果を上げた一つの理由は、経済成長という価値観を官と民が共有できたからです。今問題なのは、市場側に向き過ぎた現況から公側に向けて舵を切るために、官と民が共有できる分かり易い価値観があるように思えないことです。舵取りが遅れ、市場側に人材、資金、などの資源が偏り過ぎてしまったことも問題になるでしょう。未来に向けた舵取りは民側の自浄能力にかかっている面が相当程度あるように見えます。

日本には公を大切にする価値観が古くから浸透しています。コロナ禍でもそれが垣間見えました。アメリカが抱える問題や米中摩擦に翻弄されることなく、日本が主体的に価値観を発言すべき時代になっているののかもしれません。

■書籍『エナジー・トリプル・トランスフォーメーション』が、
第40回エネルギーフォーラム賞「普及啓発賞」賞を受賞しました。



3つの変革という新しい視点が示されている点や、今後のエネルギーシステムをわかりやすく説明している点を評価頂きました。



創発戦略センター
スペシャリスト

沢村 香苗

創発eyes

コミュニティのために何かすること

COVID-19の感染拡大を防ぐため、人との接触回避が要請されて半年以上経った。その中で私の所属するコミュニティは大きく変化した。例えば会社の提供するオフィスという「場」で、私は仕事を介して同僚たちとのつながりを形成していた。今は、オンラインで場（会議）が開き、用件が終われば即座に閉じることが繰り返されている。自由な時間が増えて生活が充実した一方で、同僚たちとのつながりは非連続で限定的なものになった。

現代の私たちの生活は、地縁や血縁だけでなく社縁（会社に限らず、共通の目的や関心を基盤としたコミュニティを指す）によって支えられている部分が多い。地縁や血縁に比べ社縁は自由に選べるが、その維持は難しい。リアルな「場」は、個人が積極的に行動しなくても、社縁を維持する装置として機能してきた。今やそれは失われ、コミュニティを維持するために何をするのが個人に問われることになった。

私がブラジルの伝統的な格闘技であるカポエイラを始めて2年ほどになる。昨年、来日した老師範が私たちを呼び集め、「自分はストリートチルドレンだった。自分がここまで生き延びられたのはカポエイラのおかげだ。だから自分はそのコミュニティに貢献したいと思って教えてきたし、こうやって日本にも来た。君たちもコミュニティのために自分は何ができるのか常に考えてほしい」と言った。文字にするとありふれているが、実際にずっとそれをしてきた人の言葉には迫力があつた。

私はもう1つ、俳句の会にも所属している。同じ場所で毎月句会をすることで、そのコミュニティは維持されてきた。誰も積極的でないが、決まった場所に集まり帰っていく距離感がちょうどよかった。集まれなくなって以降、連絡係をしている私はメンバーが徐々に元気を無くしていく様子を感じていた。そこで職業を活かし、通信環境の実態把握アンケートを行ったところ、全員がスマートフォンを持ちLINEを使用していることが分かった。高齢のメンバーが多いので意外だった。結果を踏まえてLINEのグループ通話によるオンライン句会を提案したが、主催者を含むメンバーの不安は強く、すぐには受け入れられなかった。そのため、有志を募り試行することにした。

すると、スマートフォンを購入したばかりという古参のメンバーが参加してくれた。終了後、彼女は、オンライン会議未経験でも簡単にでき、楽しめたというメールを他のメンバーに送ってくれた。そこから参加者は順調に増え、初回は緊張で前夜眠れなかった人が、今は新規参加者に段取りを説明している。比較的年齢が高いメンバーの方が、自信がないと言いながらもオンライン句会への参加意欲が高い。

もしこれが定着したら、これまでによくあった、体力低下や介護等を理由とした、会からの不本意な離脱は減らせるかもしれない。リアルな場での会だけに頼ったコミュニティから、大げさに言えば、よりレジリエントなコミュニティに変化しつつあると感じている。

そもそも誰に頼まれたわけでもないし、仕事や家庭で忙しい中、私が最初の一步を踏み出すべきか迷った。だが、老師範の言葉を思い出し、やりたい気持ちがあるなら、やってみようと思った。

アフターコロナ、ポストコロナ、ウィズコロナといろいろな呼ばれ方があるが、世界が大きく変わったのは間違いない。コミュニティについて言えば、これまでのように誰かが用意した「場」を使うことから、自分たちで場を作り、維持する営みが個人に強く求められるようになった。面倒なところもあるが、そこに存在する予測不能な変化の可能性に、私は少しわくわくしている。

■最新の書籍



[自治体・地域で出来る！シニアのデジタル化が拓く豊かな未来](#)

沢村 香苗／井熊 均／木通 秀樹

学陽書房 2020年10月30日発行

長寿化と単身化・人口減少が同時に進む中、個人やそれをとりまく地域の活力を維持・向上するには、シニアが自らデジタルツールを活用することがカギとなる。デジタルツールを活用したシニアの新しい日常生活像、活用可能な技術や地域での導入プロセスを示した書。



創発戦略センター
コンサルタント
[前田 佳栄](#)

農業

地域全体でもうかる農業を実現する“V-farmers”

日本総研では、全国の農村地域の活性化に向けた様々なプロジェクトを展開している。農村の活性化に向けてはさまざまな課題があるが、その一つが人材面だ。近年の農業ブームもあり、新規就農者や地方への移住者は多く存在する。Uターン・Iターンで農業を始める人、都会でのサラリーマン生活から農村でのゆったりした暮らしに憧れる人、最近ではコロナウイルスの影響により、観光業や飲食業から農業に転向する人も現れている。問題は、せっかく農村に来てくれたそのような貴重な人材が農村で十分に活躍することができず、早期にリタイアしてしまうことだ。日本総研では、農業を志すすべての人たちが、「魅力ある農業」「みながもうかる農業」を実現できることを目指し、“V-farmers (Virtual farmers) プロジェクト”を立ち上げた。本稿ではその概要を紹介したい。

みながもうかる農業への第一歩は、作物の安定生産に必要な「作るワザ」を身に着けることだ。作物の基本的な栽培管理手法や農機・肥料・農薬等の使い方の学習に加え、コストを下げるワザ、収量を上げるワザ、美味しさ・見た目・栄養素等の品質を上げるワザも経営の視点では重要となる。実際の農業現場では、天候の変化や、病害虫の発生等、日々目まぐるしく状況が変わる。経験が少ない場合、その日、どのような作業を優先すべきなのか的確に判断・対処できず、結果的にうまく栽培できないことが少なくない。安定生産に向けた現場のマネジメント能力の獲得が重要となる。従来の農業では一人前になるまでに10年を要するともいわれており、新規就農者が一つ一つ経験をしながら学んでいくのは非常に大変だった。しかし、こうした状況は近年のAI・IoTを活用したスマート農業の普及により改善されつつあり、農業のデジタルトランスフォーメーションによるさらなるチャンスも広がりはつつある。

こうした現場での対処方法を最もよく知っているのが、経験のある農業者や地域の営農指導員だ。V-farmersでは、作業中の動画やつぶやき（ワザの解説）を用いて、農業者や営農指導員がもつワザを見える化し、これらを体系的に整理してアプリ経由で学習・検索できるようにすることが可能となる。こうしたワザを地域で共有することによって、地域全体の農業生産技術を底上げすることができる。また、動画だけでなく、環境センサー・作業日誌・農機の稼働ログとの連動、農業データ連携基盤（WAGRI）との連携により、多面的なデータを収集していくことも計画している。蓄積したワザをAI・ビッグデータ解析によって高度化していくことで、地域に合った新たな農法の開発や、農業者に対してアプリ経由でのプッシュ型での作業のアドバイス等が実現する。将来的には、V-farmersが司令塔となって各種農機をコントロールすることで、作業の完全自動化を達成する計画だ。

ただし、安定生産ができるだけでは、農業経営はうまくいかないことに注意が必要だ。儲かる農業への第2歩は、「売るワザ」の獲得だ。経験のある農業者でも作るのは得意でも売るのは苦手という人は少なくない。V-farmersは、高く売するためのブランディングの方法や、売り先とのネットワーク等を地域で共有することで農業者をサポートする。V-farmersを核に、農業者だけでなく、自治体やJA等、地域のプレーヤーが協力してマーケティングに取り組むことで、地域全体でもうかる農業を実現することができる。V-farmersは「作るワザ」「売るワザ」の両面から地域の農業の競争力を高めるバーチャルなサポーターなのだ。

この連載のバックナンバーは[こちら](#)よりご覧いただけます。

株式会社日本総合研究所 創発 Mail Magazine (第2・第4火曜日配信)

このメールは創発戦略センターメールマガジンにご登録いただいた方に配信させていただいております。

【発行】 株式会社日本総合研究所 創発戦略センター
【編集】 株式会社日本総合研究所 創発戦略センター編集部
〒141-0022 東京都品川区東五反田2丁目10番2号
東五反田スクエア
TEL：03-6833-6400 FAX：03-5447-5695
<配信中止・配信先変更>

<https://www.jri.co.jp/company/business/incubation/mailmagazine/privacy/>

※記事は執筆者の個人的見解であり、日本総研の公式見解を示すものではありません。

Copyright (C) 2020 The Japan Research Institute, Limited.